武蔵野日曜聖書講筵

大詩篇ところどころ――「生い立ち」（乳児～東大時代）

――マタイ伝第７章７、12、21節――

１９９３年７月18日
小池辰雄

（詩）生い立ち――乳児時代～東大時代――　キリスト一切

【マタイ】

7 求めよ、然らば与えられん。尋ねよ、さらば見出さん。門を叩け、さらば
開かれん。……
12 然らば凡て人に為られんと思うことは、人にも亦その如くせよ。……
21 我に対いて主よ主よという者、ことごとくは天国に入らず、ただ天にいま
す我が父の御意をおこなう者のみ、之に入るべし。

【ダニエル】

3 顕悟者は空の光輝のごとくに耀かん　また衆多の人を義に導ける者は星の
ごとくなりて永遠にいたらん。4 ダニエルよ終末の時まで此言を秘し此書を
封じおけ、衆多の者跋渉らん而して知識増すべしと。

●（詩）生い立ち――乳児時代～東大時代――

今日は『大詩篇ところどころ』という題で、今日新しくいらっしゃった方には、聖書のお話の直接のものでないので、申し訳ありません。

『大詩篇』（『霊界の星々』１９９８年刊）というのは、自分でこんなことを言ってはおかしいですが、私は大きな詩を今書きつつある。これは世界最長の詩になります。もちろんまだ未完成で、後数年かかりますけれども。それの始めの方の所々を読ませていただきます。

生い立ち

――乳児時代～東大時代――

豊葦原の瑞穂の国の
米に因める米寿を迎え
この害われたる天体地球の
時空を越えてキリストの無者天弓は

今何処に来たのか。

私は自分のことを「キリストの無者」と申します。なぜそういう言い方をするかというと、イエス・キリストは神さまを一切となさった。自分を何ものともしない。それで、

「キリストは無者である」

という。私はキリストから「無」をたまわった。自分で悟って無となったのではない。無を、私無き世界を賜った。無私の世界。私は罪びとにすぎません。けれども、その奥にもはや自分を問題としない無の世界を、キリスト一切の世界を根底にはいただいているわけです。私はカトリックでもプロテスタントでもない。キリスト直結です。そういう気持でやっているわけです。カトリックの方であろうと、プロテスタントの方であろうと、個人的には何も私は差別はいたしません。みな大事なお友達です。

身は地上にありながらわが魂之霊は
聖霊のみ力で霊界に翔んで来た。
此処は十字架上のキリストの
両脇に十字架されていた悪人共の
一方の者が今わの極に魂砕け
「イエスよ、私を覚えて下さい
あなたの国にお入りになるとき！」
この嘆願にイエスは即答！
「本当に（アーメン）お前に言う
今日、私はお前を天国に伴れて往く！」
この天国、パラダイスに私はやって来た。
わが魂之霊は幽霊ならんや
わが肉体も霊的な生命に満たされている。
これが私の詩の世界の現実なのだ。
私は夢の中でも屢々そのような境涯に入る。
さてこの霊界から時空を越えて
わが生れし時代を鳥瞰しよう。

ポルトガル、スペイン、オランダの
遠洋航海と植民地政策に継ぎ
前世紀後半から20世紀初期にかけ
イギリス、ドイツ、フランス、ロシヤが

帝国主義的領土拡大の政策を競うた。
アメリカすらも太平洋のハワイ諸島を手に
入れてフィリッピンへの植民政策を進め
日本に国交と貿易を促した。
シベリヤを既に配下にもつロシヤは満州に
勢力を伸ばし不凍港旅順を軍港とした。
東亜の風雲ただならぬ様相を呈し
やがては朝鮮半島に勢力を伸ばし
日本の存在を脅かさんとの状勢瞭かとなり
明治天皇竟に一九〇四年二月十日
ロシヤに対し宣戦布告を発令。
かかる国家の命運に関わる
日露戦争開戦直前
明治は三十七年二月七日
東京は本郷弓町の一角に
陽光燦たる日曜の真昼時
私は光を初めて身に浴びた。
大詩人ゲーテの生誕時刻に類似したとは！
かかる風雲急なる甲辰の年なので
辰雄と命名、龍は東洋の霊獣
風雲に乗じて天に昇るという。
しかもキリスト復活の聖日の真昼時
陽を浴びたとは！
霊的摂理！　み前に平伏す。
全人類は神の大家族
各民族も国家も夫々使命的存在
互いに敬愛すべきなるに何故争うか。
軍備は戦争を招く。世界歴史は戦争史か。
善隣友好史ではないのか。
既往八十有余年を顧うと
わが国は三度び歴史的大変動に遭遇。
日露戦争、第一次、第二次世界大戦。
かかる劇的戦雲にめぐり遭ったこの身は
魂の遍歴に於ても霊的な風雲児。

日清戦争、これを義の戦いとなし
戦争肯定者なりし内村鑑三は
日露戦争開戦前には戦争を人間の
悲惨事なりとなす断乎たる非戦論者。
こは国際政治的判断からでなく
人道的に人間最大の罪過となした。

日露戦争の関ヶ原こそは旅順の大激戦。
旅順は日清戦争の際日本軍の占領下。
されどロシヤ、ドイツ、フランスの
三国干渉に遭い
わが国は遼東半島を清国に返還。
然るに帝政ロシヤは
清国からこれを横取りし
旅順山地に東洋第一の要塞を構築し
不凍港旅順を軍港となし
東亜制海の根拠地たらしめんとした。
かくて日露戦争の焦点は
旅順の要塞と軍港を巡っての
一大決戦とならざるを得なかった。
ここにその戦況の顛末を叙す要はない。
実に難攻不落の要塞旅順は
その堅牢な砲台、城壁の完璧な装備
機関砲、機関銃、爆弾等の新鋭武器
かかる武器を以てする上からの斉射には
日本軍の三次に亙る総攻撃も
死傷者の犠牲夥しく、なす術は尽きた。
竟に内地より山砲の大輸送
これが敵砲台破壊に大成功。
ともあれ敵の残塁は松樹山、東鶏冠山
二龍山、而して最高の二〇三高地要塞。
かくて第四次乾坤一擲の
最終総攻撃に移った。

さしも頑強なりし敵陣も砲撃の傷手深く
終に総崩れとなり
一九〇五年（明治三十八年）一月二日
爾霊山（二〇三）高地に
決定的な日章旗が翻る。
さわれ、この旅順攻城戦の
わが軍の戦死戦傷幾万か。
正に死屍累々山を蔽う惨状。
一九三七年（昭和十二年）筆者満州旅行の際
旅順二〇三高地を親しく訪ねたが
そのときですら白骨の破片を発見！
うたた旅順戦に感無量、しばし瞑目！
時の陸軍総指令官は大山巌元帥
旅順攻城軍司令官の中核は乃木希典大将
乃木将軍凱旋時の挽詩に曰く
「王師百万征強虜　野戦攻城屍作山
愧我何顔看父老　凱歌今日幾人還」
（王師百万　強虜を征す
野戦攻城　屍山を作す
愧ず　我　何の顔あってか父老を看ん
凱歌　今日　幾人か還る）
正に万斛の悲涙を以ての感慨の辞。
旅順攻城戦死の将兵山を作す
自分は何んな顔で家族の人に会えるのか。
人間味深厚、責任感深刻な司令官
乃木将軍らしき告白である。
将軍の二児勝典と保典の二将校も
南山及び旅順の攻城戦で「名誉の戦死」。
五年一月二日、水師営で
乃木とステッセル両将軍は
幕僚を随伴して開城談議。
乃木将軍は武士道と人間性を以て
有終の美を為した。
同年三月十日、奉天の大会戦が終結し

茲に日本陸軍は終局的勝利を勝ち得た。
満州軍総司令官は
南洲の門弟たりし大山巌元帥。

これより先、ロシヤは
バルチック艦隊を出動させ
旅順港のロシヤ艦隊救援の挙に出でた。
一隊は地中海を横断し、スエズ運河を経て
他隊はアフリカ大陸西岸を迂回して
両艦隊はマダガスカル島で相会す。
彼らはその間、旅順陥落の報に接し
且つ第三東洋艦隊の追派遣を知る
いずれの艦隊も印度洋を渡り
シンガポールを経て安南の南方で相合流。
三十余隻の大艦隊は威風堂々
ウラジオストック目指して
北東に進路をとった。
目的は日本海軍撃破に在った。
ピアノその他不要のものを海に投じ
スピード・アップ、白波を蹴立てて驀進。
コースは対馬海峡か津軽海峡か。
時正に一九〇五年
明治三八年五月二十七日、夜明け四時半
哨艦、仮装巡洋艦信濃丸が
敵艦影を発見、直ちに本隊に無電通告
「敵艦隊二〇三地点に見ゆ
　東水道へ向うが如し」
同日午後一時四十分
敵艦隊と相距る五海里。
東郷元帥の旗艦三笠の檣上に戦闘旗掲揚
続いてかのトラファルガル海戦で
ネルソン将軍が
　"England expects that every man
　will do his duty."

のZ旗を翻した如く、東郷司令長官は
「皇国の興廃此の一戦に在り
各員一層奮励努力せよ」
のZ旗を掲げた。

この日本海海戦こそは
日本の国運を決する海戦。
バルチック艦隊の二列縦陣に対し
日本艦隊は一列横陣もて敵の進路を阻む。
「天気晴朗なれども濤高し」のこの日
敵は早くも砲門を開いた。が、
わが艦隊はその距離六千 米 になるや
やや弓形の丁字形を以て
敵艦に集中砲火を浴せた。
敵味方の砲声百雷の轟くが如し。
同日夕刻、敵の旗艦スワロフは竟に沈没。
夜の帳降りるや駆逐艦、水雷艇隊が
手負いの猛獣を追う猟犬の如く活躍
大戦果をあげて、翌二十八日を迎えた。
茲に戦況を述べる要はないが
五月二十七、二十八両日を以て
バルチック全艦隊三八隻のうち
二〇隻は撃沈、五隻は捕獲、残る一三隻は
或は自爆、或は武装解除、結局全滅。
わが海軍の戦死一一六名、負傷五三六名
敵海軍の大半は戦死
司令長官ロヂェストウェンスキー外
六千余名の捕虜、という大敗。
紀元前四八〇年のサラミス海戦の
ギリシヤ海軍の勝利も
紀元一八〇五年のトラファルガル海戦の
英海軍の勝利も
この日本海海戦とは同日の談ではない。
半歳の風雨に耐え、地球半周の如き航海

波濤二万粁を乗り切って来た大艦隊が
二日一夜の海戦でその偉容を
幻影の如く消したとは。
これを旅順の陸戦に於ける
わが陸軍の大犠牲と合わせ想うとき
敵味方の戦没者の英霊に対して
筆者は茲に瞑目合掌せざるを得ない。

わが乳児時代は正に如上の日露戦争時。
高等師範（現筑波大学）附属小学校
五、六年時に、写真、挿画入りの
巌谷小波著『小年日露戦史』
全二十巻を感激して読んだ。
惜しむべし、この全巻はわが書架になし。
私には兄三人姉一人妹一人
兄三郎は乳母の乳悪しく生後三か月で他界。
母は第四児三郎からは
母乳の不足であったから。
人生は奇運、私は牛乳で育てられた。

さて、わが生れ出でし東京は本郷の
弓町の上空から八十八年前を下瞰する。
一九〇四（明治三十七）年如月七日
太陽は黄道の水瓶座と出会っている。
時正に日露開戦直前、弓町の一角に
既述の如く政吉、光子の四男として
生れいでた風雲児なるかな。
長兄政美、次兄龍二、姉は富士子
三男三郎は生後間もなく他界。
私より三年の後に妹愛子。
我らの家は同じ丘陵の妻恋に移転。
私はその二階の欄干から庭に転落
鎖骨を折ったが頸骨はまぬかれた。
ある夏のこと大磯で海岸生活

あの大浪小波は今も眼前に砕け散る。
母は程近きお茶の水女学校教員となる。
それゆえ私はお茶の水幼稚園の
園児として通園、担任は雨の森先生
先生の笑顔は今もなお眼前に髣髴。
あの藤棚の下で手に手を執って
輪舞したのも昨日のようにあざやかだ。
幼少年時代の印象の何と深きや。
編袋に円筒形の弁当箱
おかずはしばしば鶯豆
あの昔の味が蘇る。

さてここで両親のことにちょっと触れよう。
父政吉は佐渡が島相川生れ、家紋は巴藤
家系は藤原末流、生活は佐渡の金山勤務
三井系なる鉱山技師、語学の才あり
南米アンデスの金鉱探索に出張している。
わが語学愛好は父の素質に由っている。
「佐渡の金山、此の世の地獄」と詠われた
徳川封建時代の悪代官らの残虐の
昔を審判かんと
地下の金鉱採掘の様相をつぶさに再現
人形に地獄的情景を現前させている。
現実は更に酷烈人道反逆のものだったろう。
明治末年の頃金鉱は枯れて来た。
佐渡の人情はあたたかい。
佐渡おけさ踊りは優雅なものだ。
さて父は洞察力深く
天籍するに尚十年を以てせば
技師として大いに業績を
遺したに相違なしと
その死を惜しまれた由である。
即ち父は東京の本社勤めのとき
病のために他界した、私の五歳のときに。

雨のそぼ降る中を母に抱かれ人力車で
染井の墓地にゆき、土葬の際に
埋められた寝棺の上に
小さな手でひと握りの土を
投げ入れて手を合せたことが
八十余年後の今日もなお
わが脳裏の写真版に遺っている。

母光子は信州松代、明治二年の生れ。
明治維新時の先覚者佐久間象山と
明治末期から大正初葉にかけての
大女優松井須磨子と同郷の人。
ともあれ私にとり母の恩は
山よりも高く海よりも深い。
母は意志の強靭な女性
「精神一到何事か成らざらん」
の実証者。この一句は我らに対する
母の訓育のモットーであった。
母は善意を以て敢えて重荷を負い
此の世的にはまことに不幸な生涯であった。
母は太田家八人姉妹の第五女で
十七歳のとき、江戸へ出て勉強したいと
父母に願い出た。
「若い女性が独りで
　そんなことをしてはいけません」
すでに決意の光子、夜陰に乗じ
家を抜け出し、東へ東へと歩徒の旅。
それと知った両親は二人力の力車で
使者をして追跡させた。小諸で追いつく。
「御両親がお帰りなさい、とのことです」
「そうですか
　どうしても帰れと言われるのなら
　私の首をもっていって下さい！」
断乎たる光子の返答。

これには追手も降参。言に窮した揚句
「そんなにお志が堅いのなら
　お江戸へどうぞ！」
と、むしろ励まして
持ち合わせの路銀をくれた。このことは
わが青年時に母から直に聴いた。
その時私の腹の中に熱湯が湧いた。
女子高等師範学校をトップで卒業。
父亡きあと、母は
我ら五人をよくぞ育ててくれた。
生徒はあのバンドに袴すがたの
お茶の水女学校の教員生活二十年
勤務の他に家庭教師もしていた。
ついに過労のため胃腸のアトニー
ためにお粥やパン食。
母の労苦の容易ならざる相を
今もありありと想い出す。

本郷の弓町生れの私は弓が好き
竹ぎれで弓を作って金魚を狙う猫を狙った。
それに因んだわけでもないが
天弓（虹霓）が最後の雅号。
弓町から同じ丘陵地帯の妻恋に転居。
程近きお茶の水幼稚園の園児となった。
担任の女の雨の森先生の笑顔は
今もはっきり想い出す。
母に伴れられて幼稚園に通ったが
毛糸編袋に入れた円筒形の弁当箱
鶯豆のおかずが大好き。
ある時どうした原因か
藤棚の角で泣いていた。
Ａ先生が駈け寄って私を抱きあげて
「どうしたの！」
こんな愛のなぐさめが忘れられない。

もし私が画書きなら今でも描ける。
園児の中には後に東大文学部で
イスラエル宗教史を共に聴講の
作曲家諸井三郎君がいた。
そのうちに父が病気で他界し
立派な門扉の屋敷から
千駄ヶ谷の借家に移った。幼稚園は中退。
向いの家に関西生れで
「坊んちゃん」呼ばわれの
幼児がいたのでこれが唯一の友となる。
直ぐ仲好しと相なって
朝から夕方まで、遊び暮した。
中断はお午どきだけ。
「春の小川は　さらさら流る。
岸のすみれや　れんげの花に……
蝦やめだかや　小鮒の群に……」
あの唄そっくりの田園風景だ。
蓮華の花が野原一面のパラダイス。
小川には小蝦が潜行艇のように泳いでいた。
小川には狭い橋や丸太が渡してあった。
丸太はこれに股がっていざり渡った。
初夏の夕には蛍が水べにちらほら
東京といっても田園情緒まことにゆたか。
のちにこの「春の小川」の唄の発祥地が
正しく昔の千駄ヶ谷代々木だと知って
なつかしさがこみあげた。

七月のある日、ぼんちゃんと二人で
代々木練兵場への大通りを歩いていた。
道の真中に向って這ってる虫を
彼が見つけて
「兜虫！」
と言うが早いか、走り寄った。とその時
米俵満載の大八車がさしかかった。

ぼんちゃんはこれにぶつかって倒れた。
彼の首が、前輪後輪の間に位置した
その瞬間、悲鳴一声！
噫、彼は敢え無くこの世を去った。
と、その時奇しく
長兄政美が帰宅に来合わせ
驚いて直ぐ彼を担ぎ、交番に届け出た。
私はおどおど泣きの涙で帰った。
あの衝撃的な一瞬は
生涯忘れられないのだが
遠き昔をまざまざと想い出し
「ああ、ぼんちゃんに会いたいなあ！」
すると見よ、彼が何処ともなく現れた。
「ああ、辰ちゃんか、嬉しいな！
耳の恰好が昔の通りだよ
よく忘れないで呼んでくれたね」
「忘れないどころでないよ！
初夏の頃、千駄ヶ谷のあたりを
電車で通ると君のことを
想い出すこと幾度か知らないね
君が兜虫をさきにみつけたので
あんなことになって、何とも……！
もし僕が先にみつけたら
僕があのようになったかも知れないよ
君は僕の代りに霊界に先立ったのだ
君に対して言う言葉がないね」
「そんなことはないよ
僕が狼狽たまでさ」
「ああ、あれからもう八十余年が経った
僕の地上での仕事が終ったら
再会するからもうしばらく待ってね
すまないね」
「ああ、楽しみにしているよ」
彼と握手をして「ではサヨナラ！」

霊体の彼の手は若々しい生命に満ちていた。
「人その友のために生命を棄つる
　これより大いなる愛はなし」
この聖言を念いながら
彼の後姿に合掌！

幼稚園を中退したことが
私に二つの深い印象を与えた。
即ち田園情緒ゆたかな環境と
文字通り刎頸の交わりが与えられ
奪われたこと。
私は自然の光と美をおのずから体感し
心魂は自然に対する愛と情感を喚起された。
先きに父を失い、今や唯一の友を失った。
これはわがたましひの世界に哀感と
知られざる神仏への合掌の心情を誘致した。
父と友を失った寂しさは
母への甘えを増した。
夕方母が帰ってくる姿を
門べで待つ自分の姿が
今でも、夕陽への憧憬と共に浮びでる。

やがて東京は小石川林町九十四番地に転居
小学四年生までは林町時代
よく学びよく遊べの後半時代だ。
私は高師附属小学校第二部に入学
正帽は烏帽子横折りの帽子に下級生は赤総
一学年一学級男女十二名ずつ机は隣り合せ
まことに人間味ゆたかなものだった。
一・二学年、三・四学年、五・六学年
夫々が同一教室で同一先生から
異なる学科を学ぶ。
先生は一時限を巧みに教壇を右往左往して
夫々の学年に夫々の学科を教える。

かくて六年間
総半時間数で所定の学業を修得。
先生は実にヴェテラン先生たちだった。
担任は二学年ずつ同一、即ち担任三人で
六年間の教科内容を見事に修得させた。
修身(しゅうしん)、唱歌、手工、地理、歴史、理科は
一学年ずつ夫々の特別教室で学んだ。
私は修身が好きで、相島、加藤、蘆田(あしだ)の
三担任が語る史的実例談に感激。
三・四年時の加藤先生の習字の時間に
先生はわが右手を上から掴(つか)み
魂(たま)こめた迫力で
習字のこつを教えて下さった。
習字も単なる技術ではない
たましひの力だ。
何ごとも全身是(こ)れ眼是れ耳の
体感体得体現が本道。
蘆田恵之助先生は今想うと禅的な魂の人
「作文はどんな課題にも
　自分との関(かか)わりを以て書け」
と。五年生の夏休みあけの作文時間に
「この夏の面白かったこと」という出題。
私は或(あ)る温泉地で
誰にも教わらず自分の工夫で
泳ぎ得た体験をつぶさに書いた。
それは美に三重丸をつけた評価を戴いた。
高師附属小・中学では甲乙丙でなく美良可。
あの作文は何処へ往ったか。
小、中学校の少年少女よ
いろいろな作品や
教科書なども大切に保存せよ。
日記を必ず書けよ。日記は人生の歴史。
非常に大切なことだ。その素材から
後年に何か役立つことが生れてくるからだ。

同級生に宮下真一君という
異常な頭形の画の天才が居た。
正直、先生も顔負けだ。
何であれ、ちらっと見れば
それを苦もなく描くのだ。
チャップリンの活動写真を
見て来た或るとき
私の眼前でいろいろな場面を描いてみせた。
静物、動物、人物、風景、何でもござれ。
彼は中学二年生のとき夭折した。
彼の死は日本画界の損失といって可い。
弁舌も巧みで、物語の画を何枚も描き
それを綴じてめくりながら
活弁（活動写真弁士）然と、語り聴かせ
同級生を涙させたり笑わせたり。
「噫、宮下真一君！」
私の強い念波を無電の如く体受した彼が
翼もないのに飛んで来た。
「おどろいたよ、小池辰雄君！
君は霊的な人だね、昔は心の友だった
嬉しいな、ところで地上はどうだね」
「今は人情の薄れた世の中よ
昔がなつかしいよ。大正四、五年
君と親しく語り合ったあの頃が
昨日今日のように感ずるよ。
何しろ君は画の天才だから
今でもあのチャップリンの画などは
眼前髣髴だ、君の名画を
幾枚ももらっておくべきだった
後悔先に立たず、残念千万だ」
「好いよ、今に地上の歴史が終ったら
神さまが新天新地を創造って下さる。
そこは昔の地球よりすばらしい天地で

そこでは不思議な筆や画の具や画紙で
自由に描けるようになろう。
東西古今の大画家たちが
昔に優るすばらしい創造力で
奇想天外の画を描くにちがいないね。
僕もそのときを楽しみにしている！
では君との再会を待っているよ！」
「では、サヨナラ、宮下君！」
中学初年の宮下君は、霊界では壮年の相。

さて小学五年生の春の遠足
中野から井の頭までの片道徒歩である。
私は扁桃腺が腫れているので、母が
「遠足をすると病気になる」と諌止した。
それを聴かずに出かけたところ大変疲れた。
一夜にして顔が腫んだ、急性腎臓炎。
ために一学期を棒にした。
何とも申し訳なき次第であった。
しかしその間、病床で（旧制）一高生なる
長兄政美から英語をＡＢＣから学んだ。
小池政美と言えば、その当時一高文科では
英語の代名詞とされていたほど抜群だった
そんなヴェテランの兄から学んだので
私もすっかり英語が好きになり
二学期に登校したら、英語は一番
「英語の先生」などと綽名された。
病気のマイナスが
英語のプラスになったとは。
人生にはふしぎな導きがあるものだ。
このわが病中に、妹愛子が入院
可哀相に、法定伝染病たる猩紅熱罹病。
小学二年生にして彼女は天界に去った。
そのことを母は病中の私には黙秘。
噫、快活だった愛ちゃん！

あとで知った私の寂しみは何とも。
六月五日の命日には
お花とお菓子で供養する。

「小池愛子ちゃん！
お兄ちゃんだよ！」
「ああ驚いた、お兄ちゃん
どうしたの、こんなところへ！」
「何十年経(た)ったかね、でも此処(ここ)は
年数なんか問題でないだろう」
「そうなのよ、時間なんかないのよ
地上のような時計は要らないの！」
「好いね、自由自在
永遠を今として、だね
お兄ちゃんは地上でも
永遠を今としてるよ
地上で十二年かかる詩を
今書いている最中よ
もうしばらく待っていてね
そしたらこの霊界のパラダイスで
たのしく遊ぶからね」
「ええ、待っているわ、たやすい御用よ
でも兄ちゃんは偉いのね
こんなところへやってくるとは」
「偉くもないんだよ
全くキリストさまのおかげなのよ
いずれゆっくり話すとしよう
ではさようなら、愛ちゃん！」
「さようなら、お兄ちゃん！」
彼女は元気な美しい乙女(おとめ)に見えた
しかも昔の面影(おもかげ)がはっきり現れている。

その秋には一高の
名投手内村祐之の投球振りを

兄に伴れられて見に行った。
あのあざやかなカーブやドロップ
あの左腕投球のフォームそのものが
今でも眼前髣髴だ。
五大学を零敗させた一高全盛時代は
正にこの内村左腕名投手のときに現じた。
『野球界』誌の「一高全盛」特輯号が
今でも眼に映る、保存すべかりし。
後年内村祐之先生（精神病学の泰斗）を訪ね
「先生は何故、獨協（中学）に
入られたのですか」
「父が"How I Became a Christian"の
独訳（"Wie ich ein Christ werde"）が
よく売れたので
ドイツ人は私をわかってくれる
だからお前は獨協に入れ
と言われたからです」
私は笑って
「そうだったのですか！」
獨協中学五年間を内村は一番で通した。
野球のために三番以下に落ちたら、許さぬ
日曜は聖書集会だから試合参加も相成らぬ
これが内村鑑三先生の厳命だった由。
ともあれ、日曜を特に魂の日としない
日本の民主主義一般の在り方は嘆かわしい。

わが小学時代は
明治四十三年（一九一〇）春から
大正五年（一九一六）春まで。
その日常生活を垣間見れば
市内電車の往復切符が七銭
藁納豆が一銭五厘、大福餅が二銭
理髪屋が十銭、銭湯が五銭
子供の一か月のお小遣いが五十銭銀貨一枚

といったところが庶民の水準。
暮、正月は凧あげ、独楽まわし、羽根つき
いろは加留多、双六あそび、百人一首等
素朴なあの賑わいはなつかしい。
長兄政美は何でもござれの万能男児
百人一首は全部諳んじ、抜群の巧さ。
凧あげもヴェテラン、あの大凧赤龍に
すごい「唸り」と長い尾をつける。
相当の風の日に天高く揚げる兄の面影。
赤龍のあの雄姿、あの唸り、今もありありと。

後学年時の校長は佐々木吉三郎先生だ。
校長は月曜の朝、高学年、低学年交互に
全校生徒に対して半時間ほど
講堂修身なる講話を実施
内容はメモしてないが
わが心魂が感動したのは事実だ。
この校長は正に附属小学教育の柱であった。
小学卒業後七十余年も経ったある日
私は高師附属小学校を訪ねた。
若い校長さんに、私は斯く斯くの者で
今日は突然思い起ち
昔々の佐々木校長の御恩忘れがたく
何か先生の遺著あらんかと
お訪ねした旨を語ると
校長さんはある先生に
図書館への案内を命じた。
果せる哉、『教育研究』誌の
バックナンバーの中に
佐々木先生の論説が幾種も
連載されてあった。そのある部分を
コピーしていただいて辞去した。
わが小学在学当時、一学年上と下に
校長の令嬢淑子、徳子の二人が在学。

名簿により氏家徳子さんの家が
登校当時の途上近くに在るを知り
電話をかけた。彼女は驚き歓(よろこ)んだ
未だかつてこんなことを
言う人はなかったと。
その後両嬢（老婆だが）を訪ねて
懐旧(かいきゅう)の談に花咲いた。
さて徳子氏に『青年と人生観』という
校長の遺著が唯一冊あったので
それを借りてきた。
この一冊の本に先生の本質が凝集(ぎょうしゅう)している。
茲(ここ)にこの希代(きたい)の教育者の人生観
世界観を簡単に紹介しよう。
先生は大正十三年元日
伊豆の長岡に出向き
そこの大和館六畳間で一尺七寸四方の
チャブ台を机にしてこの本の原稿を書いた。
何の参考書もなく
多年の読書と体験に基づき
自由自在に書いた。
哲学的精神の先生は言う
「万人は哲学すべきである
　権兵衛(ごんべえ)、太郎作(たろうざく)、お鍋(なべ)どんの果てまで
　自分自身の人生観を以て生きるべし。
　特に青年たちは人生のスタートを切る前に
　即ち二十代に人生観を堅持(けんじ)して
　　実社会に立ち出でよ」
先生は極めて積極的な心魂の人
万物は生く、鉱物に到るまで
と物活(ぶつかつ)論を説く。
先生はギリシヤ人の如き議論過(か)多ではなく
ヘブライ人の如く
実践の裏付けを以てものを言う人。
先生は万有の差別相の奥に

万有帰一の相を洞察
多即一、一即多という
西田哲学と相通ずる哲理を告白
宗教哲学的性格が見られる。

これに因んで私見を述ぶれば
各民族各国家も
夫々天与の本質と使命がある。
何を好んで争うか
互いに特質を認識し尊重し
相助け相補って
世界の多民族、多国家が
大交響楽の如く大調和を成すべし。
それが帰一せんためには
人間として超人間の絶対者に
―それを何と名称すとも―
平伏すたましひの在り方こそが大要。
真の帰一はこれなくしては不可能だ。
平和をいかほど唱えても平和来たらず。
絶対者との縦の絆こそ平安なるぞ。
平安あってこそ横の連なり、平和が成るぞ。
人類何ぞ愚かなる
「剣を変えよ鍬鎌に」
かく叫んだ預言者イザヤが
天界で歎いているぞ。
核文明の元素プルトニウムは人類をも
動植物をも害いつつある。
況んや核兵器全廃こそ急課題。
人間が神のみ前に平伏さざる限り
何をどう議論しようと虚空に消える。
大西郷の「敬天愛人」は世界的な真理だ。
リンカーンが喝破した如く
デモクラシーが
アンダー・ゴッド（神の下に）でない限り

人間は高慢と慾と殺人の
親玉サタンの配下だ。
21世紀はいったいどうなるのか。

さて物活論の校長先生は原子構造に於ても
愛の抱合、極微分子の舞踏
元素間の親和力といった表現を用いた。
「現象は他観なり、実体は自観なり
　他観は物質にして
　自観は生命なり心力なり
　生命心力を併称して心霊という
　万物は他観せば物質と見え
　自観せば心霊と見ゆ。
　心霊の現象が物質にして
　物質の実体は心霊なり」
正に物心一如の妙諦を喝破した名言である。
「之を外観し、現象として
　研究するを科学とし
　之を内観し、実体として
　研究するを哲学の本領とす」
と道破し、宇宙の大理法を直観し
且つ宇宙を目的論的に観じ
進化して歇まずとなしている。
この宇宙に生を享けたる人生の抱負を語る。
「吾人は、進化の大潮流に投ぜられたる
　一小分子なり。此の潮流に
　幾滴かの貢献をなし
　以て社会進化の助勢をなし
　造物主をして
　余あるが為に益する所あって
　損する所なかりきといわしめよ。
　これ吾人の最終の希望なり、目的なり。
　吾人は、之を達して初めて
　莞爾として瞑目すべきなり」

先生の気宇まことに雄大にして
人生に対する烈々たる気魄
厳粛なる態度の片鱗乃至本質を茲に見た。
先生はその後、文部省の重要ポストに就き
昼夜を別たざる激務に鞅掌して
流石頑健な先生も身体を害し
壮年期に突如世を去った。
量的に未完成なりし先生は
質的に完全性を以て目的を果した。
愚生の如き小さな一小学生の魂に
不滅の印象を遺された
佐々木吉三郎校長先生！
先生のこの悲願に
なお残れる生涯を以て応えまつらん。

茲に於て胎児、乳児の原始期から
幼児期、学童時代の育児教育は
如何にあるべきかに
深く想いを致さんと欲う。
この四期は人間形成の第一段階
その責任と栄光の大半は母親にある。
母親が源泉であるから、源泉そのものの
心身の在り方が先ず問題。
女性の本質は愛、愛の源泉は何処に！
新約聖書のキリストは愛の体現者。
釈迦の仏道の極意も慈悲である。
この二大宗教の与えんとするものは慈愛。
人間の魂の本質は宗教的である。
然るに現代人はその本質を自覚していない。
21世紀はどうなるかの火急の問題は
現代人よ神に帰れ、である。
第二の国民、民族の産みの親たるべき女性
母親の責任と栄光を果さんためには
何としても偉大なこの二宗教の

いずれかに於て本ものとなれと
叫ばざるを得ない。
しかも私は自分の体験からは
新約聖書のキリストに来よと
告白せざるを得ない。そこは
愛の生命(いのち)があふれている源泉だ。
この愛にはまことの光と力がある。
若き新婚の女性よ
新約聖書の福音書を繙(ひもと)いて
キリストの愛の言動の中に
胎児の如く抱かれよ
その体感が直ちに貴女(あなた)の胎児に伝わる。
胎教これに如(し)くものなしである。
胎児を抱く母親は一般に言われる如く
美しき画(え)を見、美しき音楽を聴き
美しき自然に接し、美しき童話(うるわ)を読む。
更には心魂に愛の情、善の意志を起こし
よろこばしき知識を与えるものを
体受する等すべて胎教に不可欠の糧である。
伝記をよむと偉大な人物の母親はなべて
心魂に宗教的な深みある愛の女性。
第二は乳児期だが、かくの如き愛の母が
乳児を抱き乳房に顔を寄せて吸わせ
生命の乳と柔肌(やわはだ)を体感させるが大切。
さて第三の幼児期を迎えたならば
保育園の保母さんは、同じく愛の心と
楽しい歌心ですべてをなすのみ。
園児の生れながらの自由の心に
保母さんを通して何か天的な光と愛が
沁(し)み込んで来ることが極めて望ましい。
幼稚園では兄弟姉妹のような
友だち意識が芽生(めば)え来て
団体で楽しく歌を歌いつつ
お手々をつないで跳び回る。

男も女もごっちゃごちゃ
これがこの世のパラダイス。
それに幼稚園の女の先生が
昔がたりの民話を語り
更には聖書のおはなしや
イソップやグリムやアンデルセンを
聴かせることが極めて大切。
これらのことを母親と心を合わせて
いとなむときは
幼児の心に天的な幸(さち)をもたらす。

かくて第四期学童時代に入りゆく。
さて小学校は昔も今も六年間
胎児、乳児、幼年時代が
パラディーソ（楽園）ならば
学童時代はプルガトリオ（煉獄(れんごく)）の初期か。
私自身の小学時代は既に瞥見(べつけん)したが
現下日本の所謂(いわゆる)民主主義下の
小学校教育は概(がい)して寒心(かんしん)に耐えぬ。
何ゆえか、それは何も学校教育に限らず
日本の民主主義が
「神の下」でないからだ！
アメリカの名大統領リンカーンは
かの南北戦争で
Gettysburg(ゲッティスバーク)の決定的勝利の際に
有名な三分間演説をしたが、その終句は
"……this nation, under God, shall
have a new birth of freedom, a new
goverment of the people, by the people,
for the people, shall not perish from the
earth."　November 19, 1863
「この国民は、神の下に於て
自由の新生を得、民衆の、民衆による、
民衆のための新政治は

　地上から滅び去るべからず」
彼は「神の下に於て」と明言している。
リンカーンのデモクラシーは
民主主義の上に神があることを
見そこなっているのが日本の民主主義
これでは決して
健全な民主主義ではあり得ない。
十九世紀の三大政治家、米のリンカーン
英のグラッドストーン、独のビスマルクは
いずれも敬神(けいしん)の念深く
聖書を身読してやまざる政治家。
況(いわ)んや教育者は高次な宗教心を有(も)たずして
どうして本当の教育ができるか
日本の教育が、公私立校いずれにせよ
教育者自身が道徳心の上に
宗教心なくしては
児童にたましひの教育不可能なこと
火を見るより明らかである。
陽光を遮(さえぎ)る木蔭の下の
草花はまことにあわれだ。
その如く神の光を身受(しんじゅ)していない教育者は
小学生の魂を育て得ない。
高慢な自己中心な児童をつくって何になる。
寒心に耐えぬといったのはそのことだ。
およそいかなる主義にも限界がある。
超主義の世界即ち宗教的絶対界の
霊気をたましひが呼吸していないと
心魂が枯れてゆく。
20世紀は人間の心魂が枯れて来たので
文化文明が奇形的になって来た。
先生や親をなぐったりするあさましさ！
マルクス主義の大欠陥が
心の世界の枯死(こし)に気がついて
ゴルバチョフはペレストロイカをした。

それでおのずから東西ドイツの
鉄のカーテンが崩れ落ちた。
その後、共産主義のソ連が瓦解(がかい)し
神の下の民主的新ロシアに復活し
変貌(へんぼう)した歴史的大変革
よってアメリカは新ロシアと
堅い握手を交(か)わした。
日本は平和平和と叫ぶ。
そうではない。
神と魂の垂直関係が立ち
平安が魂の質となるところに
人間関係の本当の平和がくる。
縦の柱なしに家ができるか
横板を組んでも風で吹き飛ぶ。
何をか言わん
各教員が宗教心をもてば
大いに夫々(それぞれ)の教員の特色を発揮して
生徒を指導し、いかに学ばんか
いかに考えんか、いかに創造せんか
を指示すべし。
真理に即(そく)せる権威を以て教えると
それに従って真の自由を生徒は得る。
全体主義的な特色なき教育は
生徒の心魂をも頭脳をも眠らせてしまう。
学校の中心は校長
校長こそは霊的人格たることを要す。
私がそのような佐々木吉三郎校長に
出会ったことは深い感謝である。
以上が小学校教育の根幹である。

一九一六年の春、高師附属中学入学
この附属も固有名詞の如く通用。
小学校第五、六年は正直猛勉強
それはしかし所謂(いわゆる)受験勉強に非ず

入試第一日は国、数、習字。習字課題は
「りんきおうへん」を漢字で書け
当時は略字なく、「臨機應變」。
数学四問中一問失敗、夕刻の発表を
見に行く気なけれど、恐る懼るでかける。
禿頭の小使さんが梯子に乗って校舎壁に
大巻紙を繰り展げつつ貼る。
受験番号60がちらっと裏から見えた！
あの瞬間は生涯忘れられぬ。
失敗の数学一問の正解者四人のみの由。
第一日に落とされた受験生は
一八〇名の半数、第二日は英語の試験
英文和訳、和文英訳、書きとり、朗読
きびしい試験だ。友人曰く
　「小池君は大丈夫だよ」
長兄政美のおかげで英語の自信はあった。
合格者は三〇名のみ、中学一学年は六〇名
他の三〇名は附属小学第一部から
無試験入学。一学年二クラス六〇名
全校五学年で三〇〇名。
先生たちは優秀だった、楽しく学んだ。
英語には生粋のロンドン子、スキート先生
マクミラン・リーダーによる
充実した内容のものだった。
中学時代に私の心の糧となったのは
英詩と漢詩。例えば次の如きもの。
Longfellow : A Psalm of Life, Rainy Day,
　Village Blacksmith, Exelsior.
Tennyson : The Charge of the Light Brigade,
　Crossing the Bar, out of "In Memoriam".
Wordsworth : Rainbow, We are Seven.
Whittier : The Mayflowers
詩ではなく小説では
Washington Irving : Sketch Book.

Dien Fallar : The Three Homes, ……
Conan Doyle : Adventures of Shalock Holmes.
茲に二つの詩の和訳をかかげて
当時を偲ばんと欲う。

ロングフェローの「人生の絃歌」一、二、九節

一　言う勿れ悲しき調べに
　人生は槿花一朝の夢と。
　魂魄まどろみて死に似たるとも
　見ゆるところは真相に非ざれば。

二　人生は真実なり、人生は厳粛なり。
　塋穴いかで終結ならんや。
　塵より出でて塵に還る
　そは霊魂の謂にはあらず。

九　いざ我ら起ちて為さむ
　万難に耐うる心根をもて。
　愈々達しては愈々追求め
　働くを学び、待つを学ばん。

ワーズワースの「虹」
　わが胸は欣び躍る
　大空に虹をし見れば。
　人生の曙に然かりき
　成人の今も然かあり
　老年の暮にも然かあれ。
　然らずばわれ死なまほし！
　幼児は成人の父ぞ。
　魂極る生涯の日々を
　結びてよ生来の虚心。

漢詩では、藤田東湖の「天地正大の気」
杜甫の「春望」その他
頼山陽の「鞭声 粛 粛」
乃木希典の「山川草木」、「王師百万」

白居易の「長恨歌」
詩的散文では蘇東坡の「赤壁賦」
論語や孟子や老子等の名句
中学時代のテクスト今は影もなし。
勿論これらの原書はあるが。
要するに詩が好きなのだ。
私は詩魂の人間だ。
中学時代の運動は一年から五年まで
夏は房州富浦で先輩たちの指導によって
水泳（水府流）を修得した。
頑強な身体で、私はスポンジ・ボールで
ピッチャーかショートをやった。
隅田川ではボートを漕いだ。
フォアにもエイトにも
漕者のメンバーに入った。
和船も漕いだ。要するに水泳、野球
ボートが私のスポーツ。

さてこれより先、第一次世界大戦勃発
一九一四年の夏
私が小学三年生のときだった。
新聞に連合国元首とドイツのカイゼルの
写真が大きく載っていた。
タンネンベルクの戦に於ける
ヒンデンブルク将軍の名作戦のこと
ツエッペリン飛行船のロンドン空襲のこと
ドイツ潜水艦の変現出没のこと等
少年の心をゆり動かしたが
ドイツは終に一九一八年に敗戦を喫した。
時に私は中学三年生。

正にこの戦中、日本の演劇界に
彗星の如く現れた大女優があった。
松井須磨子その人で、トルストイの

「復活」の一場面カチューシャの
離別の前後を背景として
カチューシャに扮した須磨子が
劇中で歌った
　「カチューシャ可愛(かわい)や別れのつらさ」
の名歌名曲が日本全土を
風靡(ふうび)すること三、四年
私は今でもなつかしく、時折口吟(ずさ)む。
かくてわが中学時代は、小石川同心町の
門もない、いきなり格子扉の
借家の二階の室(へや)に長兄政美と
机を並べて五年間暮したのだが
この五年間が私にとっては
人間形成のなつかしい楽園で
何年経っても忘れられない印象だ。
それは長兄政美の生きざまが
あまりにも印象深く遺っているからだ。
一高後半と東大三年を彼はすごした。
書架には英文の詩書
小説類と法政の専門書
内村鑑三の著書と「聖書之研究」誌等。
机の右に部厚な旧新約聖書
これを半年で創世記(そうせいき)から黙示録(もくしろく)まで読破
それを繰り返していた。
夜の九時には必ず廊下の欄干(らんかん)に
両手を置いて祈っていた。
私には宗教のことは何も語らない
尚早(しょうそう)と思ってだろう。
ただその在り方が無言の伝道。
性格は明朗快活、智は抜群
情は深く意志強固
どうみても私より数段上だ。
読書力は例えばあの大作
「レ・ミゼラブル」の英訳を毎晩読んで

一週間で読破するほどの実力
一高文科の同期生間で小池は英語の代名詞。
運動は水泳、野球、ボート
和船の棹(さお)さし、何でもござれ。
東大二年の前期で三学年間の内容を修め
行李(こうり)にぎっしり本とノートをつめこんで
夏休暇中、戸隠(とがくし)の民家で準備をなして
秋、高等文官試験にトップ級でパス
民法九十八点で鳩山試験官が驚嘆した由。
一緒に銭湯で入浴したあと、ある地点から
「辰さん、ランニングだ！」
と言って、ランニングで帰宅の
バカげたこともした。
彼は大学卒直ちに大蔵省に採用
その秋ロンドン大使館への内定あり。
ところがサタンの横槍で北京公使館へ急転
晩秋彼を東京駅プラットホームに見送る。
昇降口に立っていた彼の姿は今も眼にある。
これがこの世の生きわかれになったとは！
私は翌大正十年春中学を卒業。
受験勉強手おくれで水戸高校入試失敗
直ちに神田の日土講習会通いで涵養(かんよう)
藤森良蔵の代数幾何、坂本哲三の国語漢文
いずれも教え方ヴェテラン
学び方考え方の名講
所謂受験のためでなく
実力涵養に大いに益あり
英語は既に自信あり。
その夏、北京同仁病院から電報
母と次兄龍二が急遽(きゅうきょ)北京への旅。
朝鮮半島縦断、南満州横断
山海関を越え天津(てんしん)から北京へ
長兄政美悪性チフスのため高熱
しかしキリストの愛は更に熱く

終に白衣のキリストが現れ給う。
「キリストがお迎えに来られましたので
お母さん、お先に失礼いたします。
おゆるし下さい」
これは今生最後の言。
眠るが如く九月二十二日終に召天。
地上の生涯二十六年一か月、噫！
上司公森太郎氏の弔辞の一節に曰く
「君天資穎敏頭脳明晰……
其ノ研鑽ノ蹟ヲ見ルニ其ノ方法
理路整然トシテ一糸乱レズ……
支那財界ノ諸問題モ之ヲ俎上ニ陳ベテ
利刀ヲ以テ料理スルノ慨アリキ
加フルニ君ハ非凡ノ英文読書ノ
能力ヲ備ヘ赴任以来欧米人ノ手ニ成レル
支那ニ関スル名著数十冊ヲ読破シ
碌々タル儕輩数年ノ造詣ヲ一年ナラズシテ
贏チ得タルノ想アラシメタリ……」
メイフラワーに乗って
再び帰国を想わなかった
清教徒夫妻の如き悲願が
彼は遂げられなかったので
彼は銀製の十字架を秘かに携えていた。
それには「一九一九　秋」と
英語で浮き刻りが施されてある。
ロンドン赴任を曲げられた官界に
愛想をつかし方向転換
伝道の地図すら既に準備していた。
即ち生涯独身で貫き
ハドソン・テーラーの如く
中国伝道に献身せんと地図を準備していた。
荼毘に付し遺骨を携えて
母と次兄龍二は船路黄海を渡った。
その船上で母は多年の過労と

政美の急死の悲嘆のために
噫、失明の憂(う)き目に遭うとは！
失明の母が、遺骨を抱える次兄に
手をひかれて東京駅頭に降り立った。
これを迎えた私の全身は涙か火か。
母は井上眼科病院に直行。
緑内障はその頃の医術では
ほどこしようがなかったらしい。
眠られぬ夜に襲われた。
やがて、同心町の家を去り
西大久保の武田叔父叔母の
世話になる身と相成った。
受験勉強に更に全身をうちこんだ。

一高受験の自信が着いていた。
明けて二二年春のこと
一高受験票を手にしたが
「叔父の世話の受身で
　落ちもせば申しわけなし」
と、母の諌止(かんし)にやむを得ず
水高(すいこう)受験に切り替えた。
その諌止には蔭の理由があったので
母も私も涙を呑(の)んだ。
柏葉徽章(かしわばきしょう)の白線帽子を断念したる
わが胸中(みぬち)には火が燃えていた！
水高文乙にトップ級で合格
一高に入れた筈(はず)よ。
白線とは布の白線二本が
丸帽に巻いてあるから。
兄の墓前で
　「一高を受けそこねました」
と涙の報告。残念無念、遺恨(いこん)百年
憧憬の一高を逸(いつ)したことは。
今にして思う、自信があったのだから

何故押し通さなかったか。
嬉しからざる水高入学、それかあらぬか
その初夏に腸カタルに襲われて
水戸の常盤病院生活一か月
生死の瀬戸際をさ迷うた頃
吉原知子叔母看護に来院
懇ろに重湯お粥を手造り給う。
おかげで癒り帰京はしたが、骨皮筋衛門。
百米も歩けぬ惨めな体力、遂に休学。
秋も更けたるある日
読書せんとて兄の書架から
内村鑑三著『宗教と現世』なる書を
〈Tolle, lege〉（採りて読め！）
と促される如く、採り出して
読むや直ちにわが魂は捕えられた。
政美の引いたサイド・ラインの個所は
とりわけ感謝感激を以て、全巻読破。
月刊誌『聖書之研究』も繙き始め
新約聖書に初めて喰いついた。
明けて二三年の春を迎え
体力も増して来たので
内村先生の日曜集会を聴きに行こう
そう決意して大手町の日本衛生会館講堂へ。
「幸福なるかな心の貧しき者
　天国はその人の有なり」
「幸福なるかな柔和なる者
　その人は地を嗣がん」
幟の如き垂紙に二行の墨書
原稿紙を手にしながら、力ある聖書の講義。
直ちに心が打たれ感涙に咽んだ。
讃美歌「わが魂を愛するイエスよ」
数百名の男女の合唱
何かしら、新しき心境となった。
一高に入らず、身体は病弱。

このマイナスの二乗の中で
私は藁(わら)をつかんだのではなく
キリストにしがみつくことと相成った。
一高生だったら、亡き兄の如く
内村先生のこの大集会に毎日曜
参じたに相違ない、噫(ああ)！
政美は日曜の午後、独りで
校外を散歩していた。
五万分の一の地図に歩みし跡が
赤い線で遺されていたのを
今だになつかしく想い出す。
ともあれ、福音の世界に
このようにして踏み入ったことは
わが生涯の一大転機(てんき)！
同心町時代の政美の生きざまが
福音への預言的道しるべ。
兄の北京での召天が
死を以てした決定的道案内。
二三年四月一日は復活節
そのとき「美(うる)わしの白百合(しらゆり)」の讃美歌を
内村先生は女性だけに合唱させた。
聴き惚(ほ)れたあの時の気持も甦(よみがえ)る。
水高第一年をダブル
創立第四期生となった。
水高寮生活にわかれを告げて
高師附属中学同窓の若干名の桐寮に入る。
林不二雄、平山嵩、芳賀檀、近藤駿四郎
従兄の青木四郎等と同居した。
特色ある人物揃いでいつまでも心に遺る。
私だけが病弱でなさけなき存在。
ある放課後、柔道場を会場にして
ルター研究の権威佐藤繁彦先生の講演
先生の真正面最前列で聴講した。
感激して、不日(ふじつ)ルター聖書を買いにゆく。

水戸の一番大きな本屋の書架の上段に
黒光りの立派な本が目についた。
あな嬉し、それが正しくルター聖書
早速買って、扉に日付を書いた
二三年十一月十日と。
あとになって正にこの日が
ルターの誕生の月日と知って
冥合の奇しさに感謝の合掌。
その翌年、同じ本屋で
中山昌樹著「詩聖ダンテ」を買った。
年月日を記すのは私の習慣
二四年九月十三日。
この本も感謝して読み
ダンテに強く心を惹かれた。
しかもまたこの日がダンテ帰天の月日とは。
私はどうもそういう霊しき星の下の人間だ。
単なる偶然でない、天の配剤だ。
水高のドイツ語の教授陣は一流の学者揃い
小牧、相良、吹田、実吉の諸教授と
日本学の大家グンデルト博士も在職。
法学士政美は英語、軍人龍二は仏語
私はドイツ語、ふしぎな廻り合わせ
独文の道に使命を感じた。
ゲーテの「ウェルテル」
ヒルティーの「幸福論」
ハイネの「詩集」
グリルパルツェルの「辻音楽師」
アンデルセンの「絵のない絵本」等が
ドイツ語授業の主なテクストであった。
ゲーテとヒルティーに心を惹かれ
ヒルティーの「眠られぬ夜のために」の
上下二巻の原本を福本書院に注文
これが何と九円
一か月の小遣銭が殆ど尽きた。

上巻を読みに読んだ。後日遂に翻訳する。
下巻も別な特色あり、これは友人が訳した。
ヒルティーの「幸福論」の原書もかじった。
これはドイツ語の実力涵養にも役立った。
病弱のため、どの学年も
期末試験のどれかを受けず
見込点で及第の綱渡り。
まことに惨憺(ざんたん)たる水高時代！
薬に捕われていることに気づき
卒業するや
すっかり薬を投げ棄てて帰京した。
さわれ、水高時代に終生(しゅうせい)忘れられぬ
一つの想い出がある。
しかも単なる想い出ではない。
それを茲(ここ)に記(しる)さざるを得ない。

虹

赤倉(あかくら)の夏！　というとも
誰にわかろうや。
そのようにどの人にも
その人でなければ通じない
なつかしい想い出があるものだ。
とかく病弱だった水高時代
母の教え娘(ご)が嫁(とつ)いださきの
高師附属中学の大先輩齋藤力さんが
一夏私を赤倉高原で
保養させてくださった。
あの底ぬけの親心は
わが胸中(みぬち)に生きている。
暑い暑い夏の東京から
赤倉高原に登りついたその日から
俄然(がぜん)食欲が盛りあがった。
ある午(ひる)さがり、雷雨一過のあと
陽が背後の妙高(みょうこう)山に傾きかけた頃

東のかた野尻湖の上空に
鮮やかに大半円を描いて
大虹霓が現れた！
漢語では虹は雄の龍、霓は雌の龍
正に優しき霓が上に逞しき虹が下に
淡濃二重の天弓が現じた。
紫、藍、青、緑、黄、橙、赤の主虹の壮美
その配色をさかしまにした従霓の妙麗。
感歎、魅了、飽かず眺めること小一時間！
こんな虹はわが生涯にまたとあろうか。
「われは始めなり終りなり」
の主の徴なりしかと今にして想う。
超絶の天空を走る陽光は無色の白光
み空に満つる水滴もまた無色透明の玉
無色の玉を貫いて反射する
無色の光が七彩に変現する。
七彩に宿る無限の光彩。
過ぎゆく美にこもる永遠の美。
妙なるかな霊しきかな
天地に架する天弓のすがたよ。
虹をし見れば虹となるわが身かな
キリストに祈り入る我れに我無く
キリストのなかに私の生きる如。
無即無限無量！　現象即本体！
須臾にして消えゆく不滅の相
霊的福音の真理の象徴
一切の概念、イデオロギーを超絶するもの
さればこそ一切の概念、一切の現実
一切のイズム、イデオロギーを包摂する
それがキリストだ！
いらくさの谷を涙ながらに渉り
こごしき山路を喘ぎつつよじ登った人は
高峰の花園に歓呼の声を放つ。
艱難を突破した勝利の人生。

雷雨天涙のあとに懸かるは虹霓。
ノアの洪水のあとの契約の虹。
雷雨的最後の審判のあとで
霊虹的終末の大希望が成就する。

一九二三年九月一日の正午に何が来た
関東が大地震に襲われた。
私は母の手をひき
よろめきながら戸外に逃げた。
余震のためにしばし莫蓙の上
やがて大東京が火の海に化す。
あな恐ろしや
親戚青木医院も武田邸宅も全焼とは。
神の摂理は此の如きか。
借家住まいのわが家が遺る。
畏るべきかな神の命運。
陸軍士官学校の存在のゆえに
火はのぼり来らず加賀町は焼けない。
二四、五年にかけ
従兄青木三弦氏宅に寄寓し
腎臓結石の際は助けられた。
二五年の晩秋、次兄龍二が
武蔵野村吉祥寺に新居を構え、共に移った。
夕靄が垂れると墨絵のような夕景色
縁側から居ながらにして富士を遠望
コスモスの花が小庭辺に咲きみだれ
地主の桑畠がひろがっている。
感謝の念と想い出をふくみ
井の頭の池畔を散歩した。
二六年の春
惨憺たりし水高四年の生活をあとにして
東大ドイツ文学科に入学。

東大入試準備の余裕あらなく

ぶっつけ本番の体当り受験。
志願は何か、ドイツ文学科
受験科目は独文和訳、和文独訳
国語は万葉仮名の万葉解釈
漢文は白文(はくぶん)に符号をつけて解釈
二六年春に角帽大学生。
三月七日、珍しく雪の聖日、駒沢新町なる
藤井武先生の自宅集会に参加した。
『聖書の結婚観』なる著書を賜(たまわ)る。
先生は愛妻喬(のぶ)子夫人を数年前に
天界に見送って、五人の遺児との暮らし。
お女中と隣家の小学校の先生がお手つだい。
私はこの聖日以来、三〇年七月十四日
先生の召天時まで無欠席で参会。
先生の講義は先生の生活から
滲(にじ)み出る言語的再現。
聖書の研究、思索、体験を通し
聖書の真理と渾(こんぜん)然融合した心境の告白。
藤井武の月刊誌『旧約と新約』は
所謂(いわゆる)聖書註解とは異なり
聖書学の推移に拘わりなく
聖書の永遠性を息吹(いぶ)き居(お)る
人間藤井、一キリスト者の告白文学である。
桜新町参会五星霜(せいそう)を貫いて
心底に根づいたものは
「信頼」の一語であった。
　「江戸っ子に宵越(よいご)しの金はない」
先生はその気合の神信頼
貯金を思わぬその日暮らし
執筆、著作の神与の財で
五人の子女を育て貫いた。
先生の仆れたときに
財布の中は空気のみ
借金も貯金も無いあざやかさ。

徹底したこんな神信頼を
身証したのが藤井武。
百千の聖書説教も
この実存の前に黙さざるを得じ。

先生の夕の野べの散歩の相(すがた)には
天界の夫人の影が映っていると
あるとき天使が私に囁(ささや)いた。
わが眼(まなこ)から雫(しずく)が降ちた
同じ野べを私が散歩したときに。
見霽(は)るかす丹沢の山波の上に
真白き霊峯(れいほう)富士を仰ぎ
此処武蔵野の丘の上
二本松の並び立つ陰に坐して
深き祈りを祈りしわが師を想った。
寂しさの極みを味わい
五人の子らを愛し
我らを親しく導きし師であった。

小さき群を愛せし人の
　そのなつかしき忘れな草の
　栞(しおり)の片影をうつし出ださん。
ある秋のうららかなる一日(ひとひ)
　師に伴いて数なき我ら
　三浦半島を歩き暮した。
一包みの弁当箱をステッキに
　結びつけてやおら肩にかき
　おのれも必ず荷を負うべしと
弟子らに一歩も譲らざる心
　眼眸(ひとみ)を遠く海と空とに
　指(さ)し向けて悠々(ゆうゆう)と歩む姿
今もなおわがまなかいにある。
　陽は靉靆(あいたい)たる雲にかくれて
　我らの歩みは未だ尽きない。

往き尽きて半島の端に
　到りしわれらを月は迎えた。
　やがて三崎の岩頭に立つ。
名にし負う城ヶ島なる灯台の
　灯火の明滅は夢か現か。
　空ゆく雲は月華に映えて
白鳥の飛び渡るにも似たるかな。
　時しも懸れる天心の星座
　白鳥と奇しき冥合。
やがてわれらの喉の渇きを
　癒さんと武蔵野の牧人は
　大いなる美果をとり出し給う。
これ、さきに途にて購求いし品
　師の愛こもる有の果の味
　ネクタールも此の如きか。
夕空に突如流れ渡る声
　師の心腸より湧きたつ讃歌
「清き岸辺にやがて着きて
天つ聖国についに昇らん……
　やがて会いなん愛でにし者と……」
　天界を慕う先生の
声に応えて我らも歌い
　うたい終りていくばくもなく
　小さき群のため祈り給う。
岸辺の祈りは胸底に沁む！
　三崎の波よ、潮風よ忘るな！
　我ら生きて祈りに応えん。
真鶴、蓮光寺、溝の口
　三度の散歩の想い出は
　いずれ深からざるものやある。

聖日の午前集会は
　我ら三、四の学生が
　交互に司会を承った。

講義の前に聖句の暗誦
　随意の箇所を各自撰んで。
　不得手の私は私句交りの聖句。
二七年秋は預言書の講義
　歴史的な順に預言書を大観した
　名講義に魂は満たされた。
聖日の午後は逐年、ミルトン、ダンテ
　カントを原文または訳文で
　然るべく読み且つ味わった。
更には旧約のヘブライ語
　新約のコイネーギリシャ語を
　学んで帰路は街の灯よ。

さて東大ドイツ文学科では
わが心魂にいかなる視野が拓けてきたか。
ゲーテ研究の権威木村謹治教授の
「若きゲーテ」なる名講を初めて聴いた瞬間
春風駘蕩たる原野がわが眼前に
突然繰り拡げられてゆく想いであった。
木村教授はゲーテの心境環境に
おのれを置いてその現実から
告白する如き態勢を以て講ずる
単に客観的な研究、説明ではない。
そんなことでゲーテが把めるものではない。
さて私は言おう。
所謂道学者、一般のキリスト者は
ゲーテの恋愛の事態に躓いている。
そんな眼でゲーテの偉大さが見えるか。
無相の相なる神の相に即して創造られた
人間であるとの根源意識を
ゲーテは有っていた。
だから愛は神からのもの
恋愛も夫婦愛も、親子愛も、師弟愛も
兄弟愛も友愛も、犠牲愛も

自然界動植物への愛も、動物の親子愛も
いかなる愛も本来神からのもの
これがゲーテの愛観であったに相違ない。
ゲーテはそれゆえ
アガペー、フィロス、エロースなどと
神学者の如き愛の区分を
次元低きものとする。換言すれば
謂わばカントの先験哲学の如く
ゲーテの愛も先験的に彼自身
神の愛を根源的に体感していた。
そのことの美しい告白を知りたい人は
先ず『ウェルテル』の
五月十日のくだりを読むが好い。
「ウェルテル」たる彼は原野に身を投じて
そこに我々をそのみ姿に即して
創造り給うた全能者の現在を体感し
一切を愛する者の息吹を感じている。
また自然の中に恋人の姿を観じ
またおのが魂を神の鏡と内観し
神の中に投身している。
神、大自然、女性、我というものが
神の愛と光と生命に貫かれている。
そういうヨハネ福音書的なのが
ゲーテの内なる本質であった。
ゲーテの母が正に
そのような本質の女性であった。
実にゲーテは生涯、聖書を身読し
その文学作品に於て
自由に活用、変用している。
観念的、教条的な読み方では断じてなく
聖書の中の民族的制約を乗り越えて
真に神的なるもの、真に人間的なるものを
確かと捉え、そこに生きまた生きんとした。
彼は、アレオパゴスに於ける

パウロの引用句
「我らは神の中に
　生き動きまた在るなり」
を特愛の聖句としていたことは瞭(あきら)かである。
勿論、情熱豊かなゲーテに
躓(つまず)きはあろうと、磁鉄(じてつ)の如く
彼は神極を指して生涯を生きた。
彼は成りゆく魂であった。
成りしものは殻を破って
新生せぬ限り死と見なした。
無限なるもの永遠なるものを
追求してやまぬ魂であった。
分析、総合、定義づけでなく
本質、焦点を直視し
全的にものを捉え
全的に生きてゆく気魄に
生命の世界ありとなした。
例えばメフィストーフェレスをして
次の如く言わしめている。
「これまであなたは仰山らしく
　神はどうだ、世界や
　その中に動いてゐる物はどうだ
　人間やその心の中で
　考へてゐることはどうだと
　定義をお下しになる。
　しかもしゃあしゃあとして
　大胆にお下しになる。
　好く胸に手を置いて
　考へて御覧なさいよ。正直のところ
　そんな事をシュエルトラインといふ
　男の死んだ事より
　確かに知ってお出(いで)になったのですか」
（『ファウスト』三〇四三～四九、鷗外訳）
「定義づけ（デフィニツイオーネン）」はゲーテにとって

笑止の沙汰だ。
聖書の解釈づけも彼は御免だ。
信条的神学も条文的法学も
魂を干涸らびさせる。
ゲーテは観察、研究はしても
ものやことの本質を内観、共感、体感する。
ものやことを全的に把握せんとする。
ゲーテの認識はそういう性のものだ。
全的、生命的、活物的把握、認識は
完全性ではなく
無限無量性を底に有っている。
ゲーテは正に宇宙的人物である。
瞬間に於て永遠を生きていた人間だ。
ドイツ的にして超ドイツ的世界人だ。
私が大学時代にどれほどゲーテを
把んだかは別問題だが、ゲーテに驚いた。

ゲーテは周知の如く女性を恋愛して生きた。
彼にとって女性は
魂の生成の道しるべであった。
だから大詩篇の最終句は
「永遠に女性なるもの
　我等を引きて往かしむ」
（一二一一～二　鷗外訳）
を以て結んでいる。
どこへ往かしめるのか。
Mit Lieb' und Wonne
Zur heiligen Sonne!
愛と歓びをもて
神聖なる太陽へ！
そう私はゲーテ論の中で後年
霊感を以てつけ加えた。
『ファウスト』の天上の序曲は
「太陽」を以て書き起こしている

だから「太陽」を以て終らしめたい。
ゲーテは余韻をもたせたのだろうが
この二句を天界のゲーテは見て
「その通り」と応えているようだ。
「神聖なる太陽」は神のことである。
ゲーテは太陽に於て神の栄光を見ていた。
キリストと太陽には
無条件に拝跪(はいき)するといった。

彼は人生の夫々の時機に
然るべき女性に廻り会っている。
純情のフリーデリケ
美徳的なロッテ
ギリシヤ美女のようなリリー
幻想的なベッティーナ
詩情豊かなマリアンネ
叡智(えいち)的なフォン・シュタイン夫人
天真な肉体的クリスティアーネ・ヴルピウス
憧憬的哀歌的なウルリーケ
これらの女性をその特質に於て
いつわりなく恋愛し詩の世界の現実とした。
それぞれが永遠に女性なるものの
玉の緒(お)につらなる珠玉であった。
彼を天界に導く虹彩の天橋であった。
しかも彼の愛の源泉は
正に母マーヤであった。

ダンテは反之(これにはんし)
唯一人の女性ベアトリーチェを
詩の現実で愛し抜いて『神曲』を書いた。
その詩道は流浪(るろう)十九年の難路であった。
ゲーテの女性愛は多即一、一即多であった。
ダンテの恋愛は一即一であったが
ダンテには妻あり男女四人の子らがいた。

その何(いず)れもが神への道ゆきであった。
愛の相は異なるが、愛の本質は同然。
神に帰一する恋愛は
神から出ていたからである。
そこではエロースとアガペーが
融合している。
宗教哲学者ティリッヒも言っている。
「エロースとアガペーの
　融合一致なき愛は
　真実の愛ではない」
勿論人間ダンテ、人間ゲーテも
恋愛の現実に於て
劇的な明闇の相をくぐり抜けた。
霊性も理性も悟性(ごせい)も意志も感情も
両者ともに豊かに有(も)っていた詩人である。
これらの諸性を神からのものとして
渾然(こんぜん)と融合してもっていたが
ダンテは性格上
劇的な戦の相を主流とした。
ゲーテは性格上
自然的調和の相を主流とした。
キリストの弟子で言うなら
ダンテはパウロに近く
ゲーテはヨハネに近い。
ともあれ両者とも
人間性（メンシュリッヒカイト）が豊かにして深い。
ダンテは『神曲』の
地獄（インフェルノー）
煉獄（プルガトリオ）
天国（パラディーソ）。
ゲーテは『ファウスト』の
小宇宙、大宇宙。
いかにも両者らしい大詩篇
イタリヤの第一人者、ドイツ第一人者だ。

大学三年生の学年末の
試験は青木主任教授の「ファウスト」講読。
その詩句三問の訳文
詩の好きな私は素速く書き終え
答案を真先きに提出。
これが学生生活の試験からの解放
何たる快感、あの瞬間が甦る。
而も最後が「ファウスト」であったことは
わが生涯の課題と冥合。

●キリスト一切

そんなことで、今日は聖書でなくて済みませんでした。しかし、人間小池があからさまにお伝えしたわけです。

旧約聖書のダニエル書にこういう言葉がある。

「3 **頴悟(さとき)者は空の光輝(かがやき)のごとくに耀(かがや)かん　また衆多(おおく)の人を義(ただしき)に導ける者は星のごとくなりて永遠にいたらん。4 ダニエルよ終末(おわり)の時まで此言を秘し此書を封じおけ、衆多の者跋渉(ゆきわた)らん而して知識増すべしと。**」（ダニエル12・3～4）

私たちは第一級のものを読んで、そして親しみ交わる。第一級のものでなければ読む気がしない。聖書そのものが超一級だけれども。

キリストは神一切だから、キリストは無者、何ものでもない。だから却って、

「我を見し者は父を見しなり」

と言えた。私たちは、だから、キリスト一切で、

「我を見し者はキリストを見しなり」

という根底の意識をもっていていいわけです。そんなクリスチャンは滅多にいないから、皆さん、しっかりやってくださいよ。普通のクリスチャンは

「自分の信仰がどうだ、こうだ」

なんて、そんなことばっかり問題にしている。私は

「信仰なんかありません」

と言うんだ。

「私には信仰なんかありません。在るのはキリストだけです」

と。

「求めよ、然らば与えられん。尋ねよ、さらば見出さん。門を叩け、さらば開かれん。」（マタイ7・7）

キリストが無条件に「求めよ」というのは、

「我（キリスト）を求めよ」

ということです。

「私を求めなさい。そうしたら、私自信をお前にやるぞ。私を尋ねなさい。ここにいるではないか。十字架の門をたたきなさい。必ず開かれて聖霊の世界に入るぞ」

と、私はそういうように読む。そして、後の方で

「然らば凡て人に為られんと思うことは、人にも亦その如くせよ。」（マタイ７・12）

「誰でも人に愛されたい。そのように人を愛しなさい」

ということです。

「我に対いて主よ主よという者、ことごとくは天国に入らず、ただ天にいます我が父の御意をおこなう者のみ、之に入るべし。」（マタイ７・21）

神さまの御意を祈って――私はキリストに祈るんですけれども――そして「行う」と言ったって、これはキリストから力をいただかないと行えない。祈り入って、キリストから力が来ると、できる。何でも私は受け身ですから。自分でしようなんて思ってない、できないから。

そういう意味で、私はキリストから無をたまわった。己を何者ともしない、私はキリストの無者です。そうすると、無が無限無量になる。無限無量の方に展開していく。ありがたい、この無は虚無ではないから。私が無いんです。キリストが正に自分を何者ともしなかった。神という無限無量をキリストは体現した。だから、福音書をみると、キリストは全部そこに天国を現じながら歩いている。イザヤ書35章を実現しているわけです。そういう気魄で生きていたら、力がくるし楽しい。

私はこの詩をあと5、6年で書き上げるつもりです。